

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



2004年 9月号 / 250円

編集部より	2
教育	3
ドゥア（祈り）のある毎日へ	4
ソーフィー	5
「口内炎」	8
今月のハディース「上にある手は下にある手よりも価値がある」	13
預言者たちの風格「正直であること」	14
聖クルアーンと科学「大気と呼吸」	15
リサーレイヌール「ラマダーン（第1回）」	17
映画から考える：「ザ・メッセージ」The Message	19
「異性ととの接触」	21
「断食齋戒（サウム）の秘密」	22
「カレッジの小石うちいさなわたしの、オクスフォード旅行記②」	25
詳しく学んでみましょう「断食（第1回）」	26
ギュレン氏の提案	27
サハーバ（預言者の教友）物語」より「アブドゥラ・ビン・アッバスの忠言」	28



ラマダーンを迎えると、毎年思い出す風景があります。いつの間にかもう10年近く前の出来事になってしまいましたが、私はトルコに滞在していました。ラマダーン月のある夕暮れ、日没が近づくイスタンブールの町を、家へと急いでいました。普段なら人通りも激しく、砂埃と喧騒に覆われたいつもの道が、その日はほとんど人影もなく、静かでした。私の記憶の中のその道はオレンジ色に染まり、風に舞う砂塵でどこかかすんでいます。真冬のことで、あつという間にあたりは暗く色を変えていきました。遠くの方から幻のように優しく呼びかける声が響いてきたと思うと、周りから包み込むように、いくつものモスクからのアザーンが響いてきました。遠いモスクからはかすかな、どこか物悲しいようなアザーンが、近いモスクからは大きく力強いアザーンが、それぞれわずかな時間差で響いてきて、それぞれわずかな時間差をもって終わっていきました。

みんな食卓を前にしているんだろうな、と思いました。みんな断食明けの食卓を前にしてアザーンを待っていて、だからこの道はこんなに寂しいんだな、と思いました。同時に、そこに存在する一体感、大切なものを共有する喜び、というものを実感しました。主の命令をじっと待ち、その呼びかけに応じてそろって行動する・・・自分がその日、その流れに若干遅れたせいで、みんなが共同体と一緒に行動している様子が逆にはっきりと感じられました。

紺色へ、黒色へと見る間に色を変えていった、真冬の人通りで、不思議なほど温かさが感じられたことが忘れられません。

インシャッラー、今年もラマダーンが始まります。



ギュレン氏の提案 by Dr. Suat Yildirim

ギュレン氏はヨハネパウロ教皇にアンティオキア(トルコ南西部の都市)やエペソ、エルサレムなどの歴史的な聖地に揃って訪れることや、アメリカなどの大都市で会議を開くことなどを提案した。彼はまたウルファ(イブラヒーム預言者が生まれ、火に投げ込まれた町として信じられており、中東文明の中心であった)に大学またはユダヤ教、キリスト教、イスラム教を教える神学部を開設することなどやエルサレムをこれら三つの宗教の信者たちに開かれ自由に訪問できるようにとの提案をした。これら全ての提案は三つの宗教の信者たちのよりよい理解につながる重要なステップを意味する。宗教学者として確固とした信仰を持つギュレン氏はムスリムが他の宗教の信者たちと一緒にしてもムスリムとしての信仰や信条が害されることはないとしている。また、過去の敵意は対話をするうえで障害になるべきではないともしている。

対宗教運動に対する協力

ムスリムは物質的力においてはクリスチャンに負けている。しかしながら、ムスリムたちの信仰は確固たるもので世界にオファーできることはたくさんある。現在起こっている問題の大部分は唯物主義的世界観や宗教に含まれる道徳観に人々が無関心であることが挙げられる。ゆえにムスリムやクリスチャン達は、腐敗や唯物主義文明または独自の霊性や道徳観の手中に収められた世界の傷ついた魂たちに新しい希望を注入することができるはずである。これは西の非バイアスな思想家たち (Olivier Lacombe, Michel Lelong, Montgomery Watt など) が望むことでもある。彼らは明白にこう述べている「唯物主義や世俗主義にこころ奪われた西世界はムスリムの信仰の力と神への従順さを見ることにより宗教へ戻ることができる」と。それならばなぜ対話によってイスラームの精神や道徳観を世界に推し進めていかないのだろうか? もしイスラームがイデオロギーや政治的武器として敵に勝るために使われるものとしてみられなければ、もしムスリムが名前だけのムスリムでなければ... 誰もがイスラームの価値の受け入れと推進に満足するのではないだろうか。

個人的な意見ですが、上のような意見を読むと以前クリスチャンだった私はとても暖かい気持ちになれます。一部反対する方も居られるとは思いますが、今の複雑な世界ではこのような平和路線でいくのが一番いいような気がします。余談ですがキリスト教系の同志社大学でイスラームが教えられ始めたというのも、世界平和にむけての大きなステップだと私は思います。十字軍などの問題で一步譲れないムスリムの方も居られるようですが、私は長年クリスチャンだったので彼らのすばらしさを知っていますし、彼らを知っているがゆえ寛大になれる自分がそこにいます。言いたいのは、お互いを良く知り理解することによって憎しみや過去の不和は軽減されるということです。これからたくさんのムスリム達が預言者様のように寛大になられて世界を暖かく包み込んでいけますよう切に願っています。



アブドゥラ・ビン・アッバスの忠言

ワハブは言った。

イブン・アッバスは老年になり盲目となった。私はある時彼をメッカのハラム(カアバの境内)に連れて行った。折柄そこで一団の人々が互いに激語を交わしているのを聞いて、彼らを彼のところにつれてくるよう私に言いつけた。彼はアッサラーム・アライクムとあいさつをした。彼らはイブン・アッバスに坐るように求めたが、あえてそれを断って言った。「さてアッラーに仕える人たる者の道について語ろう！アッラーに選ばれた人々はたとえ無力であろうとなかろうと、アッラーへの恐れのために絶対に静粛な態度をとるべきである。彼らは雄弁の持主で、語る力を持ち、また理解の感覚が鋭い者である。しかし、アッラーのみ名を不断に唱え彼をたたえるならば、才を十分に持つ者の心は、廣大無辺なアッラーの偉大さに威圧されて、その唇は封じられるほどのものである。彼らがこの段階に到達したならば、正しいことに向かつてのみ急ぐものである。」この忠告があつて後は、ハラムにおいてたとい二人の間でも論争する者を見受けなくなった。

イブン・アッバスはアッラーの恐れのためにいつも泣くので、涙がほおを流れ永久的の跡になって残っていたといわれる。

この物語でイブン・アッバスは、正しい道のたいへん容易な生き方を指示してくれた。これはアッラーの偉大さに対し、瞑想を凝した結果得られたものである。もしも、このことができるならば他のいかなる行為でも、誠実さをもつてたいへん容易に成し遂げ得るに至ろう。一日二十四時間の中からこんな瞑想のために、数分間でもささげるよう心がけたいものである。

購読価格(郵送料込み) バックナンバーは、1部 200円(日本以外は1部 250円)

国内: 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外: 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号: 00140-4-574489 **口座名義:** Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部